月刊公明 2023_6

住民参加の地域づくりで進める地方創生

～地域の実情に精通して、住民の立場から地域の課題を解決しようとする地方議員は、地域づくりのリーダーやサポート役として適任。庶民目線の公明議員に期待

千葉大学大学院
園芸学研究院教授
齋藤 雪彦

1. 地方創生と住民参加

昨今では、物価高や安全保障などが注目され、「地方創生」の影が薄い。

「異次元の少子化対策」が耳目を集めるが、地方創生においても「出生率の低い東京に人が集まることで少子化が進む悪循環を断ち、地方での定住を進め、人口を増加させること」が、（課題設定に問題があったとしても）本来の大きな目的の一つであった。

地方創生の功罪はいくつか指摘できる（拙稿「著者が語る」本誌２０２２年９月号）が、特に住民参加（ボトムアップ）の視点が不十分だ。つまり、行政主導（トップダウン）で物事を進めることを前提とするメニューがほとんどである。住民参加の地域づくりの支援を許容してはいるが、短期間で具体的な成果（ＫＰＩという数値目標の達成）が求められる点で、通常、年単位を要する地域づくりとの相性は良くない。地方創生の司令塔である内閣府は、行政機関の中枢にあり、地方に出先機関を持たないがゆえに、その立ち位置からもトップダウンの発想になりがちのようだ。

住民参加の重要性を改めて確認しておきたい。公共事業などの行政主導の事業においては、事業の受益者である住民のニーズを実行者である行政が把握できていない、あるいは行政の論理で事業が進められてしまうとの指摘がある。また各種補助制度（例えば、行政が住民の起業や就農を支援する制度など）では、制度が有効に機能するかは、住民の意志次第である。その使い勝手や周知の状況によっては、「笛吹けど踊らず」ということが往々にして散見される。

もっと卑近な例を挙げれば、個人の生活においても、（上から目線で）人に言われる（トップダウン）よりは、自身で考え行動する（ボトムアップ）方が、生き生きと楽しく積極的な行動につながるのではないか。

また昭和や平成の市町村合併を経て、大きくなった基礎自治体と住民の距離が離れたことも地方自治の大きな課題であるが、住民参加の地域づくりは合併前の「おらがマチ、おらがムラ」（旧村・旧町など）を住民の手に取り戻す動きであるとも捉えられる。

2. 地域づくりと地方議員

筆者は、地域づくりの専門家として、地域のリーダーとともに、各地で活動している。その中でも、地方議員が地域のリーダーとなる事例は珍しくない。例えば、岩手県大船渡市細浦地区、千葉県勝浦市鵜原地区の地域づくりでは市議会議員が、当時の地域づくりのリーダーであり、彼らから地域づくり支援の依頼があった（勝浦市では当時、地方創生人材支援制度によるシティマネージャーとして地方創生に取り組んでいた）。

考えてみれば、地域の実情に精通して、住民の立場から地域の課題を解決しようとする地方議員は、地域づくりのリーダーやサポート役として適任であると思われる。特に、庶民目線で政策を進めている公明党の地方議員の方には是非、今後、地域づくりに取り組んでいただければと考える。

3. 地域づくりを始めてみよう

本稿の目的は、地方創生の制度やその運用を論じるのではなく、本来の地

さいとう・ゆきひこ
１９６６年生まれ。京都大学大学院工学研究科修了。現在、千葉大学大学院園芸学研究院教授。博士（工学）、一級建築士。専門は農村計画・都市計画。中山間地域、都市近郊地域、東日本大震災被災地における地域づくりに関わりながら、復興計画、コミュニティとコミュニケーション、土地利用・管理などに関する研究を進めてきた。著書に『里山が危ない』『農山村の荒廃と空間管理』『むらづくり入門』など。

方創生（地方を創生する）の一助として、住民参加の地域づくりを提案するものである。そのため、以下では、地域づくりを始めるための具体的な方法を簡潔に紹介したい。地域づくりは様々な内容ややり方があるが、その一例を示すものである。

①組織の立ち上げ

一般的に、地域づくりはどのようにスタートするのだろうか。地域に課題（例：孤独死、道路の建設計画などなんでも）があると複数の住民が感じ、自らが動いて解決しようと動き出す場合が多いようだ。

経験上、数人から10人程度の仲間（スタッフ）がいれば、地域づくりの組織を立ち上げることができ、活動は回っていく。数十人の組織ともなれば、かなりのことができる。地域組織（自治会や自治会連合会など）が地域づくりを始める事例も多いが、その場合には、会長がリーダーとなり役員が「仲間（スタッフ）」ということになる。

自治体のまちづくり支援制度などを活用して、活動費の助成を受け、専門家の支援を受けるのも良いだろう。「○○地区再生協議会」、「里山の会」など、組織に名前をつけ、インターネットや自治体の広報誌に載せるのはどうか。認知度が上がり、新たな参加者や支援者が現れるかもしれない。

②環境点検のすすめ

地域の課題や解決策が明確で、すぐに活動が始められる場合は良いが、はじめに何をやるべきか迷ったときにおすすめなのが「環境点検」である。

地域の良いところや課題を発見・発掘し、地域づくりのメンバーで地域の現状を把握、共有するのである。つまり、次に行動するべきことを考える材料を得るのだ（筆者の専門である都市計画分野では、計画を策定する前に、調査分析を行うが、この調査分析にあたるものだ）。

環境点検は、(1)まちあるき・現地調査、(2)班ごとの話し合い、(3)発表会からなる。(2)の班ごとの話し合い作業を一般的にワークショップと呼ぶが、(1)から(3)の一連を広い意味でのワークショップとも呼ぶ。

ここで班ごとの話し合い作業とは、5人～10人ぐらいのグループに分かれ、テーブルを囲み、意見を出し合いながら、討論を進める方法である。講義や会議の形式に比べて、登壇者や司会が一方的に話すのではなく近い距離で討論を行うため、意見が出やすく、結果として、多くの参加者の意見を反映させ、参加者にとって納得感のある合意が形成されやすい。

では、環境点検の手順について、(1)のまちあるき・現地調査から、具体的な場面で解説していく。

例えば、地区の集会所などに集まる。可能な限り様々な階層（中高年、若年、女性など）に集まってもらうと良い。

階層ごとにワークショップを行うことも方法の一つである。話し合いの進行役、世話役をあらかじめ決めておくのだが、専門家に進行を任せるのもありである。

最初に、その日のプログラムを説明し、必要に応じて、優良事例の紹介やワークショップのポイントを解説しておく。

写真1　ワークショップの様子

次に班分けを行うのだが、地区を歩くコースで分けても良いし、自然班、建物班のように、テーマ別に班分けをしても良い。班に分かれ、班長、カメラ係、メモ係を決める。そして、地区の地図を見て、これから歩く道順を確認する。

準備ができたら班ごとに出発する。作業を通じて、参加者が打ち解けることも重要なポイントなので、記念撮影をする、班の名前を決めるなど自分たちで楽しく工夫してほしい。まずはワイワイガヤガヤと雑談しながら歩いてみよう。気に入った場所、気になる場所があれば、写真、メモを取る。

写真2　環境点検の例

あまり意見が出にくい場合もある。そんな時は、外部から参加した専門家や学生などが、風景を見ながら質問して、地元の人に回答してもらいながら歩くと、地域についての新たな気づきがあったりする。

再び、集合場所に戻ってくる。班で休憩しつつ、歓談しよう。

休憩の後、1時間から1時間半ぐらいで、歩いた結果をまとめる。撮ってきた写真を並べ、歩いた場所の解説や感想を写真とともに（あらかじめ地域の地図を貼っておいた）模造紙に貼りながら、地域の良い点や課題としてまとめていく。最後に、模造紙の余白にタイトル、メンバーの名前、まとめの文章を簡潔に書く。

各班の作業が終わった頃合いで発表会を行う。班ごとに順番で発表していく。班全員が立ち上がり、完成した模造紙を掲げ、話し合われたことを説明

する。

各班の発表の後に、それぞれ質問タイムを設け、他の参加者に質問や感想、意見を言ってもらおう。

進行役が、班ごとに出てきた意見を簡潔にもう一度まとめて、話すことも重要である。今日、何が話し合われたかを参加者全員で共有してもらうためである。同時に、話をまとめることで、次にどうしたら良いかが自然と見えてくる。このようにして次回の活動につなげるのである。

③環境点検が終わったら

環境点検の簡単な手順を示したが、環境点検を含めた地域づくりの一連の流れについては、以下のように例示してみた。

i 環境点検：地域を歩き、地域の魅力、課題を発見、発掘する

ii 地域構想をつくる：環境点検の結果を踏まえて、地域や地域づくりの大きな目標を設定する（例：①地域外の人と交流する、②農業を活性化する）

iii 地域プロジェクトを考える：地域構想を実現するために、具体的なプロジェクトを決める（例：①地域外の人を呼ぶために遊歩道をつくる、②大豆を使った特産品をつくる）

iv 地域プロジェクトを行う：実際に行動して、目に見える成果を得る（例：①遊歩道のコースを考え、看板を作成する、②公民館の調理室で大豆の菓子を試作する）

v 改善、次の活動へ：地域プロジェクトの実施について改善していく、あるいはこれを踏まえ新しい活動を考えていくなど、次の活動へつなげる（例：①遊歩道を巡るモニターツアーを実施する、②試作した菓子を改良し、イベントで販売する）

以上を雑駁に言えば「みんなで話し合い、新しい活動を実施していく」ことであり、結果をフィードバックしながら継続していくということでもある。

4.地域づくりで大事なことは

地域づくりに関わる中で、活動の達成や持続にとって、大事だと思う点を挙げてみたい。

①身体性

地域を歩く、作業を行う、一緒に食べる・飲むなど、通常の話し合いだけでなく、身体を使う行為を参加者で共有することで、関係が深まり、合意形成が進む。特に屋外での活動は効果が高い。

②楽しさ

楽しくないと人が集まらない、活動が長続きしないのは、地域づくりも同じである。住民は日々の生活があってプラスアルファとして地域づくりを行うのだから、当然と言えば当然のことである。地域の課題を解決することの社会的意義は小さくはないが、肩に力が入りすぎるのも考えものである。

③欲張らない

はじめは小さな目標を設定した方が良いだろう。参加者が達成感を感じることが大事だからである。これは活動の持続のためにも重要なことである。欲張っても長続きしないこともある。また、地域づくりの目的は「具体的に何を成し遂げるか」だけでなく、「参加者の親睦を深め、参加者が幸福を感じる」ことも重要だからである。

④平等な関係性

しがらみの多い既存の組織・活動とは距離をおき、自由で平等な関係を新たに地域で構築していくことも、地域づくりの大きな意味と考える。ワークショップで少人数に分かれ、班ごとに向かい合わせで机を囲むスタイルも、フラットな関係づくりと、これに伴う率直な意見交換のためのものである。今の時代、自主的に人に集まってもらうためには、序列的な人間関係をなるべく持ち込まないことが大切だ。

⑤地域への敬意

せっかく新しい活動を始めるのだから、「行政や企業の通常の活動では難しいが、住民が主体となる地域づくりなら可能であること」をやってみたい。一つは地域をよく知る住民が地域の良さを生かす活動だ。つまり、地域の文化や社会への深い興味や敬意が、地域性を生かす地域づくりのカギとなる。地域性を生かすことで、独自の魅力が生まれ、外部の人を惹きつけるだけでなく、住民にとっても地域に住む「誇り」が確認できるかもしれない。

⑥専門家の手を借りる

地域づくりの先進地では、住民だけで活動を立ち上げたところも多い。一方、ワークショップなど地域づくりのノウハウも蓄積されてきており、経験のある専門家の手を借りることで、効率的な活動やスムーズな立ち上がりを期待できる。

⑦無私の心と柔軟性

専門家や一部の住民の欲が出すぎると、活動がぎくしゃくして人が離れていく場合も多い。ここは「基本的な考え方や手順を踏まえていれば、活動はおのずとあるべき方向に流れていく」と考えてみたい。「こだわりを過度に持たずに柔軟でありつづける」ことも言える。

5.おわりに

地域づくりは楽しい。地域が動くわくわく感、達成感、住民の前向きな気持ちが集まっていく様を感じられる、新しく友人ができるなど、様々な面がある。

先日、ある住民は、地域づくりでできた仲間との場を「俺の宝物」と表現していた。というわけで、読者の皆さんも地域づくりを始めてみませんか（詳細を知りたい方は拙著『むらづくり入門』〈世界思想社、２０２２年〉を参照ください）。